

新刊紹介

堀江保蔵編 『海事経済史研究』

粉雪の舞う昭和42年1月8日の都大路、二条城に近隣する京都国際ホテルにおいて、京都大学教授堀江保蔵先生御退官記念謝恩パーティが開催された。宴席の終幕近く、100余人の参会者の見守るうちに、門下の人びとから、堀江先生に記念の1書が捧げられた。それが先生の御誕生日の1月5日を期して上梓され、インキの香も新しい『海事経済史研究』そのものであった。

とはいえ、本書は堀江先生御自身が編者であられる。いうならば「型破り」の記念論文集といわなければならない。

というのも、すぐる年に還暦の佳寿を迎えられた堀江先生に、門下の人びとから記念論文集刊行の希望が述べられ、これを受けられる先生のお考えが、ありきたりの「単なる論文集では意味がない」との深慮から、「共通のテーマの設定による共同研究」提案となり、たまたま門下の人びとの中に、日本の海運業、造船業・漁業などを主要テーマとして研究している人びとがあったことによって、本書が結実したかに述べられている。

しかし、『海事経済史研究』を、今日われわれが繙く機会にめぐまれたのは、ほかでもなく、「日本が海国であるにも拘らず、海事経済史の研究者が意外に少ないことであった。経済史家の関心が、もっともっと、海のことに向けられて然るべきではなからうか」との、経済史研究において、海事がともすれば等閑にふされがちで、最も研究のおくれた空白部であることの指摘と、さらにすすんで、その研究の必要と盛行を喚起し、本書をもって斯学研究のすすめの試石ないしは礎石とされようとしたことによるものである。

とはいえ、本書は海事経済史の研究のための手引き書でもなく入門書でもない。すぐれて研究密度の高い本格的な専門書であって、堀江先生が率先して一篇を執筆され、続いて日本経済史・西洋経済史の専門分野においてすでに一家をなし、学界の第一線で活躍する秀逸な門下の人びとによって、その範囲は洋の東西にわたり、海運・貿易・港湾・造船・漁業のいわゆる海事に関する事項についての日本編5、海外編4、合計9篇の論考が、それぞれ各執筆者によって日頃の研究を結晶させた健筆がふるわれている。

まず、目次にしたがって諸論考の表題をあげ、その概略を紹介しよう。

日本編

I 明治10年代の海運業	堀江保蔵
II 北前船の近代化とその背景	関 順也
III 日本における近代港湾の生成	佐々木 誠治
IV 日本近代造船業の展開	井上 洋一郎
V 北洋漁業の近代化における企業と政党の関係	三島 康雄
海外編	
VI 李朝時代の海運業	安 秉珩
VII 西印度商船とセビリヤ貴族	木田 和男
VIII 重商主義とイギリス造船業の発展	角山 栄
IX ビクトリア中期の自由貿易運動	佐藤 明

巻頭、堀江先生の論考は、海運業近代化における明治10年代の意義づけを試みられたもので、明治政府の海運業保護育成策の中で、明治初年に政府の「申し子」として創始された「廻漕会社」・「日本国郵便蒸汽船会社」の「お役所仕事」的営業状態に対し、「乗客第一主義」の営業方針で根強く苦闘しながらもこれに打勝った岩崎弥太郎の三菱会社が、国際航路では米国パシフィック・メール会社に採算を度外視して対抗し、ついで英国ピー・オー汽船会社をも凌駕して、「我輩ヲシテ日本沿海ニ雄飛セシムルニ至レリ。」と弥太郎をして豪語せしめたほどに成長し、明治10年末には、日本全国船舶総トン数のうち73パーセントの船舶を保有し、その独占的地位を確立しつつあったに対し、三菱打倒の野心の産物として共同運輸会社が設立され、三菱に対抗したが、結局は明治18年1月に合併して日本郵船会社の設立をみるにいたった経過と。今一つは瀬戸内海を中心とする西日本海域に活躍する群小の船会社が同盟を結び、やがて住友家をはじめ大阪の財界人、大阪府知事等の斡旋で大合同をなし大阪商船会社（現在の大阪商船三井船舶株式会社）が設立された明治17年5月の頃の日本海運業界の動向を、郵船・大阪商船を軸として、いわゆる「社船グループ」を中心に述べたものである。

これに続く関順也氏の論考は、「社外船グループ」に属する北前船経営の近代化について、旧幕時代からの北前船の発達過程、その経営の特質を明らかにし、明治時代には北前船も従来の大和型船から西洋型帆船へと移行はしたが、蒸汽船を主体とする本格的な海運企業にはなりえなかったのは何故か。それは北前船発展の主要因となった裏日本の地方経済が旧態に停滞し、北前船をして本格的な近代海運業に転身せしめるほどには成熟発展していなかったからではないか。どの設問のもとに、地方経済の発展状況と北前船の特質を

関連させて分析し、実証づけた誠に手堅い論考である。

ところで、大和型船から西洋型帆船さらには蒸汽船への船型の推移は、たんに船型の変化の問題だけにとどまらず、その影響は港湾の在り方に革命的な変動を惹き起した。大和船の出入に適應していた日本の港湾、それが主要な港湾であっても、開港時の出入船舶の種類・構造の変化に直ちに應じられたわけではない。むしろ西洋型船の碇泊は不可能な港湾が殆んどであったといわなければならない。したがって新時代の要求に応じる築港の必要が生じたわけで、佐々木誠治氏の論考では、1858年の日米修好条約以後の開港事情とその後の近代的港湾の建設過程を解明している。

続く井上洋一郎氏は、日本の近代的造船業について、とくにわが国の造船技術が自立化を達成した時代とされている日露戦争と第一次世界大戦の間の造船業について、この時期を特徴づける三菱・川崎両造船企業の優位性に着目し、それが何によってもたらされたかを解明したものである。

日本編の最後を飾る三島康雄氏の論考は、本書中ただ1篇の漁業に関するもので、しかも問題は今日なお新しい問題の日ソ漁業交渉の戦前版を、とくに「島徳事件」に着目して論じたもので誠に興味深い1篇である。

すなわち、極東の露領におけるサケ・マス・カニ漁業の漁区競売をめぐる、日魯漁業堤一派と虚業家の悪名さえある島徳こと、かつては日魯の社長の経歴をもつ大阪証券取引所理事長であった鬼才島徳蔵を大将とする一派との漁区の争奪戦、その虚実は別として、これに民政党と政友会、時の与党と野党がからみ、利権と術策が渦巻く紛争、社会経済状況は、かたや株式市場の相場の乱高下、かたや出漁期を目標の間にして結集した北海道漁夫あるいは東北・北陸地方の出稼漁民の生活不安の脅威にさらされての失業問題をかけての決起、世論の昂揚、「右翼の黒幕」杉山茂丸あるいは三菱商事会長三宅百太郎のすすめによる郷誠之助の登場、政界・財界の多彩な人物の登場によって、漁夫の利を占める三菱財閥、日魯の三菱への従属の結末までを、「それぞれの産業分野で合同によって大きくなり、その分野で独占を達成した企業も、何らかの形で巨大財閥の組織の中に組込まなければ、それ以上の成長を許されなかった昭和初期の日本資本主義の「資本の論理」の貫徹」を水産業についてみたものである。

海外編^{あんびよんて}・安秉珪氏は京都大学大学院経済学研究科博士課程在学学生ではあるが、いままでほとんどかえりみられることのなかった韓国李朝時代（1864—1910年）の海運業について、1876年以前における国営「漕転」（租税舟運）、朝鮮型帆船による不定期海運業の実態

と、1876年以降の日本海運業（日本資本主義）の侵入にともなう朝鮮海運業の変貌と反撥の実態を土着資料によって研究したもので、なかなかの力作である。欲を言えば、特有な事項・固有名詞、（そのものは想像・推察しうるとしても）になんらか説明の配慮があってもよかつたのではないか、そのために文章が生硬な感じで（それは私の浅学によるものと思われるが）読みづらいのは誠に惜しまれる。しかし、われわれの知らなかつたですまされぬ問題を提供し、解明して示されたのは誠に意義深いものがあると思われる。

木田和男氏の論考も、わが国ではあまり研究されていないスペインの西印度商船の問題で興味深い。スペインは1492年女王イサベラの援助を受けたコロンブスの小型帆船サンタ・マリア号（全長29メートル、三本マスト）による米国大陸発見への第1回航海によってもしられる通り海運・貿易では先進国である。少なくとも16世紀末に無敵艦隊がイギリスに敗れるまではスペインの勢力は大いに海外にのびた。この16世紀の新大陸との貿易の盛行を、船主の身元とくにセビリヤ貴族に焦点をあわせて、貴族の商人化、貿易商人の貴族化の経緯をのべ、同氏のスペイン—新大陸間貿易史研究の一端が示されたものである。

続いて、角山栄氏は、17世紀、スペイン、ポルトガルに代り、オランダと比肩してこれに打勝とうとするイギリスの通商政策、重商主義研究の空白が船舶・海運・造船業の実態の研究にあることに着目し、1660年の「航海法」の内容を検討し、それがどのようなかたちでイギリス海運業・造船業の発達を促進したかを解明した論考で、17世紀前半においては、国際的には造船業はほとんど著しい発展と進歩をみず、イギリス造船業の課題は同世紀後半にもちこされ、海軍造船所（海軍の軍事力）の強化に造船業発展の基があつたことをのべている。なお、ニュー・イングランドの植民地造船業、イングランドの民間造船業、スコットランドの造船業にもふれ、植民地造船業とスコットランドのそれと補完関係を明らかにし、イギリス造船業の実態を詳述している。

最後に、佐藤明氏は、「ビクトリア中期の自由貿易運動」について、「自由貿易の帝国主義」論に関する覚書と副題に記されているように、現代の標準的見解として H. J. ハバックの見解、「旧植民地制の崩壊」の著者 R.L. シャイラーの見解、これらの通説に対する J. ガラガー、R.ロビンソンの批判論文「自由貿易の帝国主義」の論旨をあげ、さらに O. マグドネーの反批判論文「自由貿易の反帝国主義」などをあげて、イギリスの帝国主義の美化論・擁護論を批判論考したものである。

以上9篇についてその概略を紹介したが、諸篇とも、とくに海外編は、案内も暗く浅学のための的はずれな紹介になつたかに思われる、記して執筆者の寛恕を乞う次第である。

（海文堂出版、昭和42年1月刊、A5、261ページ、1,200円。）—津川正幸—